

天皇・ホームレス・浄土真宗 : 柳美里『JR上野駅公園口』試論

著者	山? 正純
雑誌名	昭和文学研究
巻	78
ページ	83-97
発行年	2019-03-01
その他のタイトル	The Emperor, the Homeless, and the Jodo Shinshu Sect : On Yu Miri's JR Ueno koenguchi
URL	http://hdl.handle.net/10466/16464

天皇・ホームレス・浄土真宗

——柳美里『JR上野駅公園口』試論——

山崎 正純

【要旨】国文学の共同体的親密圏の内部でその政治性の隠蔽が行われた痕跡を明らかにすることが、日本語文学に期待される批評性である。本稿はそうした問題関心から柳美里『JR上野駅公園口』を論じる。語り手の男性は、「浩宮徳仁親王」と同年同日に生まれた二一歳の息子の突然の死に直面し、以後天皇と皇太子との世襲関係によって包摂される国家・国文学的閉鎖空間の政治性に、その外部を語る浄土真宗の宗教的空間の側から接近・遭遇する。本稿は、還相回向の宗教的教説の上に成立するこの作品の独特の語り構造と、国家・国文学的言説の相互依存的了解の無根拠性を吉本隆明、時枝誠記の所説を参照しつつ明らかにする。

【キーワード】柳美里 天皇制 ホームレス 浄土真宗
言語過程説

日本語文学について考えようとするとき、いわゆる国文学（日本文学）に対してそれを相対化し、多くの場合グローバルイズムの観点から、国文学の閉鎖的共同性に対して、相対的に公共的な、声なき声の主体としてのパリアの政治性をもって対峙しようとする文学を想定するだろう。国文学の閉鎖的共同性は日本語文学の公共的政治性によって批判され、歴史の大海に埋もれたマイノリティの声を、国文学の壁を打ち破り響かせなければならぬ。九〇年代を通じて日本文学研究が直面した世界情勢と、想定外の大規模災害が津波のように繰り返される状況の苛烈さは、国文学研究の共同性を保持することを不可能にしたのである。

だが果たして国文学は、日本語文学という概念の成立によって何を否定され、また何がそれにもかかわらず生き延びているのか。両者がともに日本語で書かれていながら、書き手と日本語との距離が文体と主題の両面で顕在化することが、従来の国文学の共同性に対してどの程度の深度までコミットできているのか。そうした問題については、多くの場合看過されてきたのではないだろうか。日本語モノリンガルとバイリンガル、トリ

リンガル、ポリグリットと、この順で国文学への批判性が単線的に高まるものではない筈である。とりわけ、バイリンガル層に含まれるものの、「両言語とも話者の年齢相当のレベルに達していないダブル・リミテッドの存在は、日本語文学内部の階層性をも浮き彫りにする。

日本語文学を实体として捉えようとする、その脱中心的な開放系の中に輪郭を見失ってしまうだろう。日本語文学はその内部に脱中心化せざるを得ない揺らぎや、ねじれを内包しているものであって、その不安定性そのものを個々の文学実践の中に見出し、指さすほかないのではないか。国文学の内向きで排他的な国民主義をどのようにして暴き、クリティカルに問題として切り取るかという具体的な行為遂行性によって、日本語文学の可能性を捉えるしかないであろう。

日本語文学の行為遂行的な性格は、国文学の共同体的親密性が言語的場を拡大し強制する局面や、その親密圏の内部で政治性の隠蔽が生じる局面で最も顕著に表れる筈だ。日本語内部の文化的偏差を埋没させ、あたかも最初からそのような偏差などなかったかのように、平坦なさら地にしてしまうのが、共同体の欲望である。日本語文学の可能性は、いつの間にか出現した言語的さら地現象の深部に、文化的偏差が埋没遺跡のように横たわっていることを、繊細なセンサーによってモニターに映し出すことにあるとあってよいだろう。

本稿はそうした問題関心から柳美里『J.R上野駅公園口』(二〇一四)に焦点を絞る。語り手の男性は、「浩宮徳仁親王」と同年同日に生まれた二一歳の息子の突然の死に直面し、以後「天

皇陛下」と皇太子との世襲関係によって包摂される国家・国文学的閉鎖空間と、その外部を語る浄土真宗の宗教的空間との境界線を浮き上がらせる。還相回向の宗教的教説の上に成立するこの作品の独特の語りの構造と、さらにその構造から大きく逸脱し拡散しながら、穢土としての現生の歪みを鋭く照射する本作の言語的試みを考察し、国文学の領域を踏み越える日本語文学の政治性的一端に触れたいと考える。

一 語りの構造

『J.R上野駅公園口』は、作品の末尾近くで轢死する語り手の死後の言葉で全編が語られており、およそ敗戦後から老年に至るまで、近親者の死を織り交ぜながら最新自死に至るその瞬間、(とその直後に垣間見た驚くべき光景)までを語るところに特徴がある。作品の末尾の自死から作品冒頭の語りが始まるという時間構成であり、この語りの円環を直線に置きなおし、語り手の人生を整理すると、およそ以下のようになる。

語り手は「昭和八年」に「福島県相馬郡八沢村」に生まれ、十二歳で敗戦を迎えるが、戦後の食糧難を父母を支えて弟妹七人を養うために、「いわきの小名浜漁港」に出稼ぎにでる。二三歳で「節子」と結婚。「昭和三十五年二月二十三日」、皇太子と同日に長男「浩一」が生まれる。「浩宮徳仁親王と同じ日に生まれたから、浩の字をいただき、浩一と名付け」た。二年後、長女「洋子」生まれる。「レントゲン技師の国家試験に合格した」ばかりの長男「浩一」が「下宿先のアパートで寝たまま死んで」

でいるのが発見される。享年二一歳。「浩一」の訃報を受けた日以来、語り手は時間が止まったように感じ、過ぎ去らない悲しみに苦しむ。六十歳で出稼ぎをやめ「郷里の八沢村」に戻る。長男の帰郷を待っていたかのように、父母が相継いで他界。七年後、妻「節子」が急死。享年六五歳。「自分は酒に酔って熟睡し、隣で妻が息を引き取ったことに気付かなかった。自分が殺したも同然だ」と思う。長女「洋子」の娘「麻里」が、一人暮らしになった語り手の世話を兼ね、同居。この頃、「浩一も節子も眠りに命を取られてしまった」と思い、眠れなくなる。一年後、「二十一歳になったばかりの麻里を、祖父である自分とこの家に縛るわけにはいかない」と考え、「探さないでください」と書き置きして家を出る。六八歳。以後五年間、「上野恩賜公園」でホームレスとして暮らす。語り手にとって東京は、三〇歳から東京オリンピックの競技場建設の土方として一年間働いて以来。七十三歳の冬（上野恩賜公園管理事務所の「張り紙」の日付では、二〇〇六年一月二〇日）、いわゆる「山狩り」当日、「天皇陛下の御料車」と出くわす。同じ「昭和八年」生まれの天皇と生きた「七十三年間」を、「一本」のロープが仕切っている。「自分は、一直線に遠ざかる御料車に手を振っていた」。その後、語り手にある悟りが到来する。「JR上野駅公園口の改札を通り、「2番線」へ。線路上に飛び降り轢死。

「昭和八年」生まれの語り手が自死を遂げたのは、「山狩り」の当日、二〇〇六年一月であり、二〇一一年三月に発生した東日本大震災の四年数か月前のことである。作品の末尾、「山手線内回りの2番線」ホームにいつものアナウンスが響く。「まも

なく2番線に池袋・新宿方面行きの電車が参ります、危ないですから黄色い線までお下がりにください」。この「黄色い線」を境として、此岸と彼岸とが断絶し、またある意味で接続している。語り手がこの「黄色い線」を越えて線路上に身を投げた直後に起こったことは、次のようなことだ。

心臓の中で自分が脈打ち、叫び声で全身が撓んだ。

真つ赤になった視界に波紋のように広がったのは、緑だった。

田圃……水張って、田植え終わったばかりの今年の田圃

……夏んなったら毎日草取りしねどなんねなあ……（中略）

……川辺の野原に降り注ぐ眩しい光……

常磐線鹿島駅そばに広がる青々とした田の風景。語り手は幼いころからこの風景を見てきた。出稼ぎで北海道に行っても、「十月初めには稲刈りに帰る、そんな暮らしを三年ぐらいつづけた」。続いて「子どもの頃から見慣れた右田浜を歩いている」自分を見出す。「時折海から風がやってきて、（中略）生暖かい吐息のように頬を撫でていく」。

風の後ろ姿を目で追って、見てから、それが生まれ育った

北右田の部落だと気付いた。

我が家は海から見えないはずなのに、はつきりと屋根が見えた。

見慣れた郷里の風景だが、実際には見えない筈の屋根が見えている。この光景が現実のものではなく、語り手が実際に郷里の田を見渡し、海辺を歩いているのではないことが示される。「目に映る全てが明るくくつきりとし過ぎていて、風景を見て

いるのではなく風景から見られているように感じられた」という記述からも、この郷里の風景が生きた人間として手で触れ足跡を残せる世界ではないことが感じられる。まるで異界から侵入した不審者のようにこの風景から見つめられている語り手は、あくまでこの世界の他者としてその空間の中に不安定な位置(空間ではなく)を与えられている。この世界の時間は、此岸に流れていた現世の時間とつながりつつ、ねじれている。続いて四年数か月後に現実世界を襲ったあの²大災厄が、語り手の眼前にその姿を現すのである。

海鳥の群れが鋭い声で鳴き、松林から一斉に飛び立ち、上空の風に乗って滑るように飛び交うのが見えた。

グオーツとジャンボジェット機が離陸するような地鳴りがして、音という音が鎮まった一瞬の後、地面が揺れた。

電信柱が時化の海を行く船のマストのように揺れるのを見た。

語り手は、「生まれ育った北右田の部落」が見える「右田浜」を歩いていた。地震が発生した二〇一一年三月一日一四時四六分その瞬間に、自死した語り手は狙ったようにこの「右田浜」に現れたということだ。四年余りの時間の空白を越えて。何のために? 「津波は松林の上で砕け、土煙を上げながら船を巻き上げ、木をへし折り、畑を流し、家を壊し、庭を潰し、車を巻き込み、墓石を倒し、家の屋根、壁の木切れ、窓のガラス、船の重油、車のガソリン、テトラポット、自動販売機、布団、畳、便器、ストーブ、机、椅子、馬、牛、鶏、犬、猫、人、人、男、女、年寄り、子ども——」。語り手はその壊滅の渦の中に、孫娘

の「麻里」の姿を捉える。

引き浪に持って行かれ、孫娘と二匹の犬を乗せた車が海中に沈んだ。

潮の息遣いが静かになった時、車は海の光に包まれていた。フロントガラス越しに麻里の動物病院のピンク色の制服が見えた。鼻や口には海水が入り、波に漂う髪の毛は光の加減で茶に見えたり黒に見えたりした。見開いた両目は眼差しを失くしていたが、きらきらと輝く黒い裂け目のようだった。(中略)

抱き締めることも、髪や頬を撫でることも、名前を呼ぶことも、声を上げて泣くことも、涙を流すこともできなかつた。

語り手は自死し、その直後に「真つ赤になった視界」を感じたのだった。その視界に「波紋のように」緑色が広がったのと、その緑色が「北右田」の「田植え終わったばかりの今年の田圃」だ気付くのはほとんど同時だ。だが、「今年の」というその年は、いったいいつなのか。自死の直前まで生きていた二〇〇六年の「田植え」だと語り手自身がとっさに考えたとしてもおかしくはない。語り手の前を次々に流れて行く光景を追いかける限り、二〇一一年三月一日一四時四六分その瞬間のありさまが、自死直後の語り手の認識の地平に、まるで立ちのぼる幻影のように立ち現れたのだと理解する他ないであろう。自死の直後に四年余りの時間を越えて、実際に発生した大災厄を、語り手の彼はまざまざと知り得たのである。すなわちその壊滅の光景は、語り手の外の世界そのものであると同時に、彼の内部

の世界に生じた出来事でもあるのだ。その両義性こそが、孫娘の危機に直面しながら、語り手がいかなる救済の手段に訴えることも出来なかった理由なのである。

作品はこの後、孫娘を呑み込んだ「水の重さを背負った闇の中から、あの音が聞こえてきた」という形で、本当の現実、つまり語り手が自死を遂げた「山手線内回りの2番線」ホームに鳴り響く電車の音、雑踏の音と「まもなく2番線に池袋・新宿方面行きの電車が参ります、危ないですから黄色い線までお下がりにください」といういつものアナウンスが三分おきに流れる現実に、ねじれていた時空が巻き戻されるように戻ってくる。死者として、そこに再び舞い戻った語り手は、作品冒頭から始まる通りの言葉を語り始めるのである。

二 天皇とホームレス

だが、語り手が時空を巻き戻すように戻ってきたのは、自死を遂げた直後の「山手線内回りの2番線」ホームではない。時計の針は東日本大震災が発生した翌年のある日を指している。自死から五年以上経過した二〇一二年の「上野恩賜公園」。語り手がホームレスとして五年間そこで暮らした場所に、自死後の語り手の視点は置かれている。そこから見えるもの、聞こえるものを拾うように語りながら、語り手の過去を凝視するように振り返る。作品の語りの基本的な構成がここで定まることになる。この語りの現在が、二〇一二年であることが読者に明示的に示されるのは、やはり東日本大震災をめぐる記述である。

コヤの中からラジオの国会中継が漏れている。

「昨年三月の事故を踏まえて、複雑な感情を持っていらっしゃる国民がたくさんいらっしゃることも承知しておりますけれども、それを踏まえて、国論を二分するテーマについてもしっかり責任ある判断をしなければいけないのが政府の役割だと思っておりますので、折につけそういうご説明はしていきたいという風に思っています」

(中略)

「内閣総理大臣」

「色々なアンケートがあると思います。それぞれ色々なアンケートをしていること承知でございますけれども、基本的には、被災者の皆様のためには、これは、我が政権は昨年の九月に発足をしましたけれども、震災からの復興、そして原発事故との戦い、日本経済の再生、これは最優先かつ最大の課題として位置付けております。そして、被災者のために寄り添った政策というものは、しっかりとこれからもやっていきたいと思えます」

この記述の通りなら、鳩山・菅・野田と三年三ヶ月続いた民主党政権の最後の政権となった二〇一一年九月発足の野田佳彦内閣がこれにあたる。作品を貫く時間軸は、語り手を中心にみれば、大きく彼自身の死によって二分される。だが生前と死後の二つの位相は、「上野恩賜公園」という場、そこでのホームレスとしての生活、ホームレスの日々を追う語りによって媒介されている。第一次野田内閣が九月二日の初閣議で決定した九か条からなる「基本方針」の劈頭「一、一昨年の政権交代の原点

に立ち返り、「国民の生活が第一」との理念にのっとり、政権交代の意義を実感してもらえよう、国民目線に立った政治の実現に邁進する。」と謳った事実が、「上野恩賜公園」での「山狩り」の事実とぶつかりながら、なお語り手が「御料車」に向けて手を振るといふ事実とともに、語り手の自死の意味を幾重にも屈折し、解きほぐしがたいものになっている。天皇とホームレス。両者を媒介する「上野恩賜公園」という場。そしてこの問題系に「東北」が交差する。

上野恩賜公園のホームレスには、東北出身者が多い。

北国の玄関口——、高度経済成長期に、常磐線や東北本線の夜行列車に乗って、出稼ぎや集団就職でやってきた東北の若者たちが、最初に降り立った地が上野駅で、盆暮れに帰郷する時に担げるだけの荷物を担いで汽車に乗り込んだのも上野駅だった。

五十年の歳月が流れて、親兄弟が亡くなり、帰るべき生家がなくなつて、この公園で一日一日を過ごしているホームレス……

戦後の日本経済を底辺で支えた人々のメンタリティとして、天皇への信愛の情が否定しがたいエトスとしてある。だがそのこととは一見全く無関係に、多くは「東北出身者」だという彼らの郷里に、国策として建設された原子力発電所が稼働している。働き手として働き詰めに働いてきた五〇年間、天皇とホームレス、天皇と原発といった問題に向き合う余裕もなかった。対抗イデオロギーとしての戦後民主主義とも無縁に生きてきた人々である。語り手がそうだったように「運がなかった」だけで帰

る家を失い、ホームレスとなつた彼等には、上野は彼らの人生のスタート地点であり、同時に終着点すなわち死に場所でもあるに違いないのだが、「上野恩賜公園」から彼らの存在を排除しようとする圧力は、皇室・皇族を中心に生成する宗教性と政治性の両方から容赦のない暴力として襲いかかる。

宗教的権威が政治的統治者として権力を握ることで、揺るぎのない〈国体〉が成立する。二つの位相を一つに癒着させるために振るわれた暴力とそのため強いられた犠牲は、事後の視線からは見ることができない。だがとりわけこの語り手にとつて、天皇の存在が人生のいわば規範として背景に意識され続けたことは、見逃すことができない。このことが、語り手に天皇制の宗教性と政治性という、見えにくいが確実に存在する二つの位相をつなぐ縫い目、縫合された微かな痕跡の存在に気付くきっかけとなつている。

目と鼻の先に天皇皇后両陛下がいらつしやる。お二人は柔和としか言いようのない眼差しをこちらに向け、罪にも恥にも無縁な唇で微笑まれている。微笑から、お二人の心は透けては見えない。けれども、政治家や芸能人のように心を隠すような微笑みではなかった。挑んだり貪ったり彷徨つたりすることを一度も経験したことのない人生——、自分が生きた歳月と同じ七十三年間——、同じ昭和八年生まれだから間違えようがない、天皇陛下はもうすぐ七十三歳になられる。昭和三十五年二月二十三日にお生まれになつた皇太子殿下は四十六歳——、浩一も生きていれば四十六歳になる。浩宮徳仁親王と同じ日に生まれ、浩の一字をい

ただき、浩一と名付けた長男——。

自分と天皇后両陛下の間を隔てるものは、一本のロープしかない。飛び出して走り寄れば、大勢の警察官に取り押さえられるだろうが、それでもこの姿を見てもらえるし、何か言えば聞いてもらえる。

なにか——。

なにか——。

声は、空っぽだった。

自分は、一直線に遠ざかる御料車に手を振っていた。

ここに描き出されているのは、同じ年に生まれた二人の老人と、同年同日に生まれた彼らの二人の息子が、かくも隔てられた運命を辿ったことへの嘆きに留まるものではない。「柔和としか言いようのない眼差しをこちらに向け、罪にも恥にも無縁な唇で微笑まれている」その微笑みが、「大勢の警察官」による隙のない警備と、語り手もその一人であった国民の「天皇陛下、万歳」の熱狂と「御料車に手を振」るエトスによって守られることで、天皇の権力の暴力的排他性が国民の眼から隠され、隠すべき何ものもない表層そのものとしての微笑みと化して出現しているという事実である。語り手が、「天皇陛下」に向けて言いたかったことは、同じ年月を生きた人間として共有できる筈の、この自分の人生の報告であったであろう。「浩の一字をいただき、浩一と名付けた長男」の死は中でも聞いて欲しい人生の苦衷であったに違いない。働き詰めに働いたその人生もまた、「天皇陛下」に報告するに値すること、「天皇陛下」が深く耳を傾け、心底からねぎらわれてよい事実だったはずである。だが、語り手

の「声は、空っぽだった」。語り手が伝えたいと願ったことは、「天皇陛下」にとっては意味のないことなのではないか。「一直線に遠ざかる御料車に手を振」りながら、語り手は宛先を失った自分の声を呑み込むしかなかったのである。

自分の声の究極の送り届け先として、語り手の人生の収束点であった筈の「天皇陛下」に去られた語り手は、世界認識の枠組が大きく揺らぎ、認識の地平を閉ざす壁の存在を「悟る」。だが壁を越えてその向う側に行くことは、人生の支えを自らの手で捨て去る行為に等しいのであり、新たな支柱が語り手の内部に創出されない限り、彼は主体性を恢復しないまま朽ち果てる危機を回避できない。一方この局面において戦後民主主義のイデオロギーは全く無力である。語り手が「天皇陛下」を間近にした瞬間に悟ったのは、「罪にも恥にも無縁な唇で微笑まれている」という「天皇后両陛下」の人間としての不自然さ、不気味さであり、その表層そのものと化した非人間的な微笑みが隠蔽する闇の奥深くに測鉛の糸を降ろす時、死と相続によって連続と支えられてきた天皇制の根に吸い摂られ、天皇制を支える養分として死んでいく人々の分厚い岩盤に突き当たる筈なのである。

語り手がこの後、自死に向けて歩き出すのは、天皇制の根に吸い込まれていく流れとは異なる死を選びとろうとする主体化への促しであり、認識の地平の全的更新に向けて歩み出したのだと考えることができる。

空を見上げ、雨の匂いを嗅ぎ、水音を聞いているうちに、いまこれから自分がしようとしていることをはつきりと悟

った。悟る、という言葉思い付くのは、生まれて初めてだった。何かに捕らわれてしょうしょうというのではなく、何かから逃れてしょうしょうというのではなく、自分自身が帆となつて風が赴くままに進んでいくような――、寒さや頭痛はもう気にならなかつた。

「七十二年間」生きてきて、「悟る、という言葉思い付くのは、生まれて初めて」だったと語り手は言うが、加賀越中から江戸後期に相馬に移住した真宗門徒の苦勞話を父親から聞いて育ち、彼の近親の者が他界するたびに「阿弥陀経」を聞き、「和讃」を唱えてきた語り手には、「真宗勤行集」を信じた「加賀者」の信心が身近に常にあり続けたことは疑いない。語り手はここで、先祖伝来という「加賀者」の信心をもつて、天皇の不気味な微笑みの根源を見届けようとしているのである。語り手の背中を押すのは、例えば父親のこんな言葉だ。

亡くなつと同時に仏様に生まれ変わつて、お浄土があらたちんごさ帰つてきて、三百六十五日、四六時中おらたちを守りつづけてくれる。(中略)「南無阿弥陀仏をとなふれば 十方無量の諸仏は百重千重圍繞して よろこびまもりたまふなり」つてこの真言勤行集にかいである。お念仏を称えたら、亡くなつて仏様になつた人たちが百重にも千重にもおらたちを取り囲んでくださつて、喜んで守つてくださる、と。

あるいはまた、「浩一」他界に際し真宗「勝縁寺の住職」が息子の死を呑み込みかねている「節子」にこう説いていた。

仏様に生まれ変わるといふことは、我々を救つてくださ

る側の方に生まれ変わるといふことです。阿弥陀仏様のお手代わりとして、今度はこの我々を、今この娑婆で苦しんでいる我々を濟うために、阿弥陀仏様より位が下の菩薩となつて還つてきてくださるんですよ。だから、亡くなつたら終わりなんてことはあり得ない。

ここに頭れているのは、天皇制の政治性・宗教性の根拠を天皇制とは異なる原理によつて把握しようという極限の智慧への欲望である。「まさに願わくは衆生とともに深く経蔵に入りて智慧海の如くならん」。独特の語りによつて展開するこの作品が、大枠として往相回向から還相回向へと向かう道筋を辿っていることはあきらかであろう。律令制以前の宗教的権威としての天皇制の地点に遡ることができたら、それが政治的な制度に転化する過渡期に行われた巧妙な作為を見届けることができる。それを可能にするのは、「智慧海の如くならん」と欲すること、すなわち真の知者となることをおいて他にない。

三 天皇制と浄土仏教

吉本隆明が「天皇および天皇制について」(一九六九³⁾)の中で「異族関係と支配被支配関係とを縫目がわからないほど完璧に消滅させ、即位の祭儀として収奪した仕方はあまりに見事なもので、歴史的な各時代はほとんどこの縫目をみつけだすことができなかつた。そしてこのことが祭儀の司掌自体に、最高の(威力)をあたえてきた唯一の理由であるとおもえる。」と述べているのは、この小説の語りの構成によつて天皇制が隠蔽してきた

「縫目」を見届ける視座として、浄土仏教を持ち込んだ作者柳美里の天皇制認識に対応している。語り手の「自分自身が帆となって風が赴くままに進んでいくような」感覚は、人間理性の外部性の存在に否応なく気付かされた真正の宗教的感覚であろう。真の知識に無限に接近することが、人間としての生死の境界を越えて行われる浄土仏教は、この小説においては、「天皇皇后両陛下」の微笑みの不自然さに気付かないか、あるいはその不気味さの根源を見ないまま、不問に付す人々の共同性に対して、他者として向き合う主体的基盤を提供するものであると言えるだろう。

だが読者は語り手のこの悟りが、死後成就していないことを知っている。往相から還相へと進みゆき、「気が付くと、この公園に戻っていた」という語り手は、「阿弥陀仏様より位が下の菩薩となって還って」きたのだろうか。はっきりしているのは、この「菩薩」には真の知識は与えられていないこと、そして還ってきたこの語り手には人一人を救う力とて備わっていないということなのだ。

死ねば、死んだ人と再会できるものと思っていた。遠く離れた人を、近くで見ることができたり、いつでも触れたり感じたりすることができると思っていた。死ねば、何か解るのだと思っていた。その瞬間、生きている意味や死んでいく意味が見えるのだと思っていた、霧が晴れるようにはつきりと――。

でも、気が付くと、この公園に戻っていた。どこにも行き着かず、何も解らず、無数の疑問が競り合ったままの自

分を残して、生の外側から、存在する可能性を失った者として、それでも絶え間なく感じて――。

還相回向の相にある筈の語り手には、息子「浩一」の他界したその日から止まったままの「時」があるだけである。「あの時が、ばらまかれた画鋏のようにそこかしこに散らばっている。あの時の悲しみの視線から目を逸らすことができずに、ただ苦しむ――」。「天皇皇后両陛下」のあの微笑みも、その意味を現わすことはない。天皇制と浄土仏教という事なる二本の直線を交又させることで、何が描かれたのであろうか。

作中に「浩一」の死に関して次のような一節がある。

位牌を持って、霊柩車まで短い葬列を組んで歩いた。

この辺では男の子が生まれると、「位牌持ち生まっちゃえ、いがったない」と言われるし、「なんだ、この位牌持ちが！」とからかったりもされる。

位牌持ちが居なくなってしまった。

位牌持ちが位牌になってしまった。

語り手には生前から死後に至るまで変わらぬ自己了解のパターンがある。それは自分は「運がなかった」という認識パターンだ。この自己了解は「浩一」の死に際し、語り手の母親が口にした次の言葉が消えずに残ったものである。

八十歳になるお袋は合掌して、孫の顔に白布を被せて言った。

「これまで苦労ばっかして仕送りさ金え注ぎ込んで、これがらやと楽できるはずだったのに……おめえはつくづく運がねえどなあ……(略)」

「おめえはつくづく運がねえどなあ」というお袋の言葉が、胸の上に雨のように染みてきて、布団の中で拳を握り締め「たという語り手の様子にも、「位牌持ち」を亡くすことの痛手の深さが読み取れるが、「位牌持ち」を喪うことが、死ぬことの不可能性として語り手を襲っていることがここに顕れている痛手の深さの意味なのである。語り手は布団の中で考える。

努力をしている、と思った。

努力から解放されたい、と思った。

自分は、浩一の死を告げられてから努力をしている。

これまでも働く努力はしてきたけれど、今している努力は、生きる努力だ。

死にたいというよりも、努力することに、疲れた。

こうして語り手は、果てることのない生きるために課された努力を前にして、生きることに力尽きようとしているのだ。語り手は更に考える。「浩一は、どこにいったのか……もうどこにもいないのか……」。『浩一』が「浩宮徳仁親王と同じ日に生まれ」たという設定の重みが明らかになる。「皇太子殿下は四十六歳——、浩一も生きていれば四十六歳になる」。「皇太子殿下」が健在である限り「天皇陛下」は退位できるのだ。皇位継承順位は「皇太子殿下」の交代要員の存在を保証するものであり、その意味では「陛下」の退位は生前退位という例外的措置をも含め、制度的に常に確実に保証されている。そして語り手もまた、「位牌持ち」の「浩一」に見送られる筈であった。そのような終焉が用意されていて、ようやく生きる努力は報われる。「おめえはつくづく運がねえどなあ」という母親の言葉が消し難い痛

みとともに自己了解の核心に刻まれてしまうのは、男系相統によつて維持される共同体内部における、息子探しの迷路に迷い込むことの恐ろしさの故であり、「四十六歳」という「皇太子殿下」の年齢と同じであるはずの「浩一」が二十一歳の若さで他界してしまったという、「生きる」ことに意味を与える死の儀式の最大の要諦を見失ったことに由来するものといつてよいであろう。

「この辺では男の子が生まれると、「位牌持ち生まれ」といって文化構造と、皇室世襲との構造的な一致があり、しかし皇室には確実に世襲が可能になるような制度的な保証があるのに対し、語り手にはそれが無いという、わずかだが決定的なズレがあらかじめあり、語り手の方の「位牌持ち」の死によつて構造的な一致が崩れ、そのことで語り手がこれほど深刻な苦衷の中に落ち込むというあり様が、この小説に描かれた世界であることは否定できない。天皇制と浄土仏教との対立の構図は、農耕祭儀を相続する天皇制が、戦後の今日に至るまで農耕文化を政治的に支配する際の道具として浄土仏教を利用しつつ共存した構図として読み替えられなければならないことになるだろう。「浩一」の法名が「釋 順浩」であり、住職は「釋迦の『釋』の字を姓にします。『順』の一字は、仏様の教えに従うという意味です。最後の一字『浩』は、俗名の浩一からいただきました」と言うのだが、もとは「浩宮徳仁親王」からとられた「浩」である。俗名とはいえ、釋迦に従うという「釋順」の二文字が、「順浩」にシフトし天皇制への帰一を意味する部分と共存するという奇妙な法名の構成になっているのも、

異なる二つの体系を共存させることに長けた浄土真宗の神髄といえは言えよう。天皇制は俗世の地平で浄土仏教の説く永遠の浄土の絶対性を横領し、浄土仏教の末法思想は天皇制の根に絡めとられた常没流転、五濁の凡夫の自覚、無慚無愧の生活の後にしか、弥陀の本願による救いはないとするのである。

二〇一〇年四月に行われた座談会で富岡幸一郎が『山手線内廻り』を取り上げて「うまく作品をまとめるとか、プロットで感動させる小説があつていけないとは言わないけれども、現実ときしみ合う烈しさ、どう現実と対峙するかという、それが小説の真の力でしょう。うまくまとめてしまえば、非常に安易なものにしかならないと思うんです。」と発言したのに対して、柳美里はこう語っている。

物語が最後のページで閉じられてしまうということに違和感をおぼえていて、決して閉じない、開かれた物語を書きたいなど。現実世界の軌みを聞き取って、その軌みを軸にして物語を立ち上げ、その物語の軌みを現実世界に響かせたいんです。

さらに「黄色い線の内側までお下がりください」というアナウンスが流れますよね。自殺者はそのアナウンスに従わずに黄色い線を踏み越えてしまったわけですが、その瞬間までの人生があるわけで、その軌跡を書きたい」という柳の同じ座談会での発言が『JR上野駅公園口』にも通じるものであることと合わせて、現実世界の軌みを小説の内部で解消せず、そのまま現実世界に投げ返したいとする柳の先の発言は、『JR上野駅公園口』末尾で、死後の語り手が、郷里の「右田浜」が津波に襲わ

れ「北右田の部落」が壊滅するのを見届けた直後、「ゆらゆらとプラットホームが浮かび上がり、再びあのアナウンスを聞きながら「あの音だけ。血が通っているような——、鮮やかな色の付いた流れのような音——」が聞こえてくるという作品冒頭に接続している。

たしかかなものは生死を分ける境界線だけであり、その境界を冥界に向けて跨ぐことによって、生前の罪障感や様々な苦衷が解きほぐされ、そこから解放されるというストーリーには根拠がない。むしろこの境界線を越えることで認識の感度が更新され、生前解消されることがなかったあらゆる軌み、いわば人の世の構造的な歪みは一層鮮明に死者を苦しめ、その苦しみに耐えきれず、生前の世界がどこで歪みねじれたのかを正面から問い返すことが、永遠に反復される。柳美里は先の発言でそのように言おうとしているように思える。そのことを『JR上野駅公園口』冒頭で語り手は既に語っていた。

人生は、最後のページをめくったら、次のページがあつて、次々めくっていくうちに、やがて最後のページに辿り着く一冊の本のようだと思っていたが、人生は、本の中の物語とはまるで違っていた。文字が並び、ページに番号が振ってあつても、筋がない。終わりはあつても、終わらな

残る——。

朽ちた家を取り壊した空き地に残った庭木のように……
萎れた花を抜き取った花瓶に残った水のように……

残った。

ここに残っているのは、なに？

境界線の直前まで生きて、人生は一向に収まりがつかない。筋が混乱し、解決や解放には程遠いまま境界線を跨ぐこと。それが死だというのである。そして死後には、「空き地に残った庭木」や「花瓶に残った水」のような、主役が立ち去った後の舞台、生の現場だったはずの場だけが残される。空虚な抜け殻のようだが、「疲れの、感覚」や「痛みが在る」。そこに流れる「似たような時間の中に、痛む瞬間が在る」。それが死後に至りつく世界である。だがそこは自分という主役が不在の舞台だ。そしてこの風景は東日本大震災最後の光景とも重なってくる。それが死後の世界ではなく現世の姿であるということが、この作品が描き出した最大のパラドックスなのである。

四 零記号と日本語文学

作中「上野の森美術館」に展示されている「十九世紀初頭に活躍したルドウーテというフランス宮廷画家の薔薇の絵」のキヤプションが点々と並ぶ。その間を埋めるように、美術館を訪れた人々の「薔薇の絵」とは無関係な会話が続く。だが途中から語り手の過去に訪れた様々な別れの追憶へと転調する。父母の死、妻「節子」の死、「新世界」の「純子」との別れ、孫娘「麻里」との別れ。全体を覆う「百六十九点」の「薔薇の絵」のキヤプションとの関係性は、生きてこの美術館を訪れた人と死後の語り手とは大きく異なる。当たり前のことだが、死者と現世を生きる者とは、場を共有できない。共有された場を持

つことで、共通の了解の枠の内側に共に収まること。生きるとはその意味で、場を共有することである。語り手は「十九世紀初頭に活躍したルドウーテというフランス宮廷画家の薔薇の絵」について次のように語る。

背景は白い紙のまま、何も描かれていない。庭に咲いているのか植木鉢に咲いているのか、晴れているのか曇っているのか雨なのか、朝なのか昼なのか夜なのか、春なのか夏なのか秋なのか、薔薇が咲いていた時と場所はわからない。

「十九世紀初頭」に描かれた「薔薇の絵」には背景がない。そのことで、この薔薇は見学者との場の共有の可能性を奪われている。

薔薇の絵を描いたルドウーテという画家は、百七十年も前に死んでいる。絵のモデルとなった薔薇の木も、もう生きてはいないだろう。ある時、ある場所に、ある薔薇が咲いていた。ある時、ある場所に、ある画家が生きていた。そして、過去の現実から疎外された紙の彼方で、この世には存在しない空想上の花のように、薔薇は咲いている。

過去、間違いなく咲いていた薔薇を写實的に描いた絵は、今の時空に生きる人たちとはいかなる意味でも共有できる場を持つていない。では、「百六十九点」の「薔薇の絵」は一体何なのか。これらは死後の語り手と同じ位相にあつて、語り手に多くの別れ、多くの死を想起させるもの、現世に位置と空間を与えられた〈死〉そのものなのである。額縁に収まったかに見える「薔薇の絵」は、現世に収まるべき場を持たない他者に他な

らない。

時枝誠記は「言語の存在条件として、一 主体（話手）、二 場面（聴手及びその他を含めて）、三 素材の三者を上げることが出来ると思う」とした上で、「場所の概念が単に空間的位置的なものであるのに対して、場面は場所を充す処の内容を含めるものである」と述べる。

場面の存在ということは、いわば我々が生きているということに外ならないのである。場面の概念が、言語の考察に必要であるということは、場面が常に我々の行為と緊密な機能的関係或は函数的関係にあるが為である。

（『国語学原論』⁶）

「上野の森美術館」の「ルドゥーテの『バラ図譜』展」に集まった来館者の会話が八つ。だがそのどれ一つをとっても、読者としてその会話の場を共有できるものがないことには驚かされる。二人の生きた人間が、主体的にその場にかかわる行為として発話がある。来館者たちの会話が成立しているのは、この場の存在があるからで、死後の位相にある語り手もまたこれらの会話の場の埒外に置かれている。そして「十九世紀初頭」に描かれた「薔薇の絵」も、この語り手と同じ位置に置き去りにされているのだ。

言語の存在条件の一つに「場面」を挙げた時枝の言語過程説は、さらに「国語」の文に統一を与える機能を重視する。文が統一されるとは、文を言い終えた時点で場が成立し、その場を共有する主体的話者間の相互依存的な了解が確定することを意味している。

国語においては、用言は一般にそれだけで概念と同時に陳述を表現する。坂道を登らうとする時、次のやうに叫んだとする。

あぶない。

右の表現は、表面上は一語でありながら、零記号の陳述が伴つてあるものと見て、これを文と認めることが出来るのである。

（『日本文法 口語篇』⁷）

時枝はさらに「文に統一性があるといふことは、それが纏まつた思想の表現であることを意味する。如何に語が連続してゐても、纏まりのないものは文とは云ふことが出来ない」と説く。文に「統一性」と「纏まり」を与えるのが、文末の「辞」あるいは「零記号」である。では、「上野の森美術館」のあの会話の群れが、どれ一つとして「統一性」や「纏まり」を持たないものにはしか見えないのはなぜだろうか。簡単に言ってしまうと、「国語」に「統一性」や「纏まり」が重要なのは、この言語が内向きの閉鎖的言語だからである。同じ日本語を用いても、一文言い終え、収まりがつかない表現はいくらもある。そのような「国語」使用者は、主体的発話者として認知されない。無視され、排除される。場を共有し、相互依存的な了解のもとで余韻嫻々となるためには、場は常に閉じられていることが必要である。

「国文学」は「国語」由来の性質を天皇制と共有している。⁸すなわちそれらは、場の無根拠性を不問に付し、死者の死の意味を現世の共同性、場の閉鎖性内部に収奪することで成立する。柳美里の『JR上野駅公園口』は、「国語」並びに「国文学」の

「統一性」と「纏まり」を付与する「零記号」に向けて、浄土真宗から借用した死の語りをもつて打ち返し、不問に付されてきた「国文学」的な相互依存的了解の場の無根拠性を、多面的に描き出した日本語文学作品である。

注

(1) 『JR上野駅公園口』（河出書房新社、二〇一四年三月）。

この作品からの引用は河出文庫『JR上野駅公園口』（二〇一七年二月）に拠る。

(2) 連載エッセーを編集した『国家への道順』（河出書房新社、二〇一七年一〇月）には東日本大震災にかかわる記述が多く見られる。その日、柳美里はソウルにいた。ソウルのホテルのテレビに映し出される「津波に吞まれる家や人や車、火の海と化した入江の集落、白煙が立ち上がる原発の様子」に、「わたしは一睡もしないで「どうしよう、どうしよう」と両手を握り合わせて嗚咽し続けました。／あの日を境に、わたしの時間は進むことが出来なくなりました」とあるのはその一例だが、『JR上野駅公園口』の描写と符合する言葉が並んでいる。

(3) 吉本隆明「天皇および天皇制について」は、『戦後日本思想体系5 国家の思想』（筑摩書房、一九六九年九月）の巻頭に「解説」として掲載されたのが初出である。引用はこれに拠る。

(4) 天皇制と浄土真宗との関係性を歴史的に概観する上で、小倉慈司・山口輝臣『天皇の歴史9 天皇と宗教』（講談社

学術文庫、二〇一八年八月）が参考になる。また、超国家主義下に置かれた浄土真宗が日本主義によって収奪された事例を挙げて考察したものとして、中島岳志『親鸞と日本主義』（新潮選書、二〇一七年八月）がある。

(5) 『柳美里 1991-2010』（翰林書房、二〇一一年二月）所収。「座談会 「物語」を紡ぐ現代の巫女は、サイバーフロアを逆流する。」、出席者は、柳美里、川村湊、富岡幸一郎、原仁司。

同書に収められている論考「死の一線からの言葉―『山手線内回り』のなかで、著者の富岡幸一郎は「ホームの黄色い線を踏み越えようとしながら、洪水のように耳に飛び込んでくる騒音、雑音、駅のアナウンス、それらが自分の身体を濁流のなかに置き去りにしていく」と述べ、「8月の果て」以降の柳美里の作品が顕著に示しているのは、この「聴く」ことによって「書く」ことだろう」と論じる。さらに『山手線内回り』（河出書房新社、二〇〇七年八月）の宗教性について「作家がここで聖書を引用していること、しかもヨブ記という神義論（神の義を人間の側から問う）を持ち出しているのはやはり見逃すことはできない」と述べて、旧約聖書の預言者の位置に柳美里を置き、「現代の虚無の円周にひとつの風穴を開けた」と論じている。『JR上野駅公園口』と『山手線内回り』とは、駅ホームの「黄色い線」や自死といった点で明らかな共通性があるが、音を聴くことへの傾斜と「神の義を人間の側から問う」宗教性の指摘は『JR上野駅公園口』を読み解くうえでも重要である。

(6) 時枝誠記『国語学原論』(岩波書店、一九四一年二月)、「第一篇 総論 四 言語に対する主体的立場と觀察的立場」。引用は『国語学原論(上)』(岩波文庫、二〇〇七年三月)に拠る。

(7) 時枝誠記『日本文法 口語篇』(岩波全書、一九五〇年九月)。引用はこれに拠る。

(8) 時枝は『日本文法 口語篇』の中で、「国語の構造の特異な点」として、「あたかも、風呂敷が種々な品物を包んで統一を形づくつてゐるのに似ている」ことを挙げてゐる。文末の辞や零記号の陳述によるこのような統一形式(「主体、客体の合一した具体的な表現」)は、天皇制の宗教的・政治的支配と相似形である。『JR上野駅公園口』の語り手は、生前二度、「天皇陛下」と出会つてゐる。一度目は「昭和二年八月五日」であつた。「お召列車が原ノ町駅に停まり、天皇陛下は駅前に下車されて七分間滞在」した。語り手は「駅前に集まつた二万五千人の一人として、帽子を被らず、身じろぎもしないで、天皇陛下」の到着を待っていたが、姿を現した「天皇陛下が、中折れ帽のつばに手を掛けられ会釈された瞬間、誰かが絞るような大声で「天皇陛下、万歳!」と叫んで両手を振り上げ、一面に万歳の波が湧きおこつた」。主体、客体の合一した場が突如として形成される「風呂敷」のような統一形式の具体的な現われが描かれてゐると読むことができるだろう。